

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

北京の住宅事情① 訪問した集合住宅

北京に赴任している友人が、日本の某ハウスメーカーの住宅群に住んでいるというので訪れた。

築二八年で新しいとはいえないものの、一五〇世帯程の外国人対象の公寓（集合住宅）である。ガードマン付きオートロックの公寓で、敷地内は北京市内であるにも関わらず、広い曲面で作られた道路の両脇に沿って気持ちの良い佇まいになっていた。

敷地内に、スーパー、幼稚園、公園、テニスコート、プール、そして週末用のバーベキューコーナーもある。行き交う人同士が、にこやかに会釈して、落ち着いた暮らしが形成されている。

だが、この敷地を一步離れると、道路を渡るのは信号があるうとなかろうと、日本のルールに慣れた私には命がけだった。友人いわく「日本人は、信号がある方が危ない。なぜなら信号を頼るから」と言うのだ。

ちょうど季節がハロウィンなので、子供たちが思い思いの格好で家々を練り歩いていて、それも公寓の敷地内ならではのことだろ

う。私が泊まったホテルは、その公寓から一〇〇メートルしか離れていないのに、友人は車に轢かれるのを心配して迎えに来てくれた。

敷地内でも欧米人の住宅群とアジア系の人たちの住宅群があり、欧米人の住まいには、どうやら英語の出来るメイドさんがいるらしく、建て方・広さは異なり当然家賃も全く違う。ここではなぜか、家賃相場がその時々によって変わるらしい。同じ築年数、同じ面積、同じ間取りでも家賃はバラバラで、彼女もあまりに違うので門外漢の私には教えてくれたものの、人にはいくらで借りているのか公表しないようにしているとか。

建物の築年数からいっていろいろと不備が起きてくる。どうやら大きな声で、しっかりと主張することが大事なようだ。その点はこの国でも同じかもしれないが、「ピアノの上に棚がないのは困るので付けてください」と主張したと聞いたときには、少し驚いた。家具が全てセットされての入居だからかもしれない。

ホテルは日中友好に関わ



中国の公寓

った別の友人が同行していたこともあり、建築家の黒川紀章氏が日中青年交流中心と併設して建てた二世紀飯店に泊まった。中国語の「中心」はセンターの事らしい。通常の旅行と今回大きく違ったのは、どのホテルでも社長との会食があり、中国式接待を経験したことだ。あるホテルでは、ちょうど社長が中国ホテル協議会の常任理事に専任された日でもあり、北京タックを頂きながら「乾杯！乾杯！」が続いた。飲み干して、杯が空であることを相手に見せることが礼儀という中国でも、近年は「随意随意（自分の自由で）」と言えば許されるようだ。そして、用意していただいたスイートルームで「中国豪華客室」を堪能した。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。